

要塞 第2章

takamiism

「けーちゃんに、報告したいことが」
休み時間になり、数学の問題を解いているところだった。
ノートを閉じ、石井さんを見る。

「え、報告？」

「あるのであります」

石井さんは、敬礼している。

「何？」

「もう」

「何？」

「わが陸上部に、新しい部員が入ったのであります」

「この時期に？」

「うん」

「ほかの部活をやめて、入ってきたの？」

「そう、剣道部だったかな」

「そういう人、珍しいの？」

「入っている部活を変えるのは、そうかもね」

「そうなんだ」

「途中でやめるだけなら、結構、いるみたいだけど」

「運動部は、そういうの、ありそうだね」

「読書部は、どうなの？」

「うん？」

「部員、増えそう？」

「どうかな」

「難しいよね、お互い」

「最近、考えていたんだけど」

部室に入り、椅子に座ると、先輩が言った。

「何ですか」

「部員を増やすのは、陰しい道のりだね」

「ほかの部活をやめた人って、いますよね」

「いるだろうけど、また新しい部活に入ろうとは思わないんじゃないかな」

「じゃ、部活に入っていない人って、いますよね」

「おそらく、少しは」

「そういう人たちにアピールするのは、どうですか？」

「アピール？」

「読書部って、何をやっているのか、謎ですよ」

「部員がそれを言っちゃうくらいにはね」

「たとえば、夏休み、活動を一切しませんでしたけど」

「それは、自宅待機というか」

「何を待っていたんですか？」

「夏の間に貯蓄したやる気は、秋まで大事に持っておこう」

「二学期になっても、目新しいことは、特にしていませんけど」

「目には見えないからね」
「やる気を感じられない言い方ですね」
「いつも心に太陽を」
「ぜひ、行動で示してください」

「図書室」と書かれたプレートを見上げた。
扉を開ける。古い本の匂いに包まれる。
長方形の机が並び、多くの頭が見えた。
奥の開架スペースにも、たくさんの制服姿がある。
本の返却の手続きが完了するまで、その様子を眺めた。

「ふと思ったんですが」
先輩は、閉じた窓を眺めていた。雨が降っていて、外は暗い。
「そのまま、口に出さないという選択肢もあるよ」
「先輩」
静かになった。
「本を読みたければ、図書室がありますよね」
「そうだね」
「家から持ってきて、休み時間に読むこともできますよね」
「読みたければ」
「読書部に入る必要、ないですね」
「まあね」
「認めちゃいましたね」
「追いつめるね、大宮さん」
「追いこむことで、打開策が生まれるのではないかと」
「何も出てこないみたいだよ」
先輩は、天井を見ている。
「文芸部も、ありますよね」
「あるね」
「本や小説となると、まず文芸部が思い浮かびますよね」
「だろうね」
「読書部の出番、ありませんね」
「反論の余地がない」
先輩が、天井を指さした。
「やっぱり、何も出てこないみたいだよ」
「もう、このままなんですかね」
「敵が多いということで」
「だから、何です？」
「燃えてきたね」
「暑苦しいので、近くに来ないでください」

「あ、大宮さん」
部室に向かおうと、階段を上るところだった。
下田さんが、階段を下りてくる。

「これから、読書部に？」
「うん。下田さん、部活は？」
「今日は、解散ということになって、もう帰るところ」
「早いね」
「実はさ」
 下田さんが、近付いてくる。
「部員が、やめちゃって」
 小声になった。
「そうなの」
「それで、今、大変なんだ」
「でも、文芸部は人数、多いから」
「部員が多いと、それはそれで、色々あるから」
「色々」
「読書部が、うらやましいな」
「え？」
「人数は少なくとも、仲、よさそうだから」
「悪くはないけど」
「けど？」
「よくもない」
「どっちなの」
 そう言って、下田さんは笑った。

「先輩、何をしていますか？」
 顔を上げると、先輩が腕を組んでいた。
 机の上に、開いたノートが置いてある。
「考えているふり」
「それ、読書報告のノートですよ」
「さあ、どうだろう」
「先輩」
 先輩は、ノートを静かに閉じた。
「書く気になりましたか」
「いや、そんな気になれなくて」
「今、書こうとしてましたよね」
「気のせいだと思うよ」
「部員の数が増えれば、ノートもすぐに埋まりますね」
「増やすことも大変だけど、その後のこともあるよね」
「え？」
「増えた後も、それを維持するのは、難しい」
「そうですね」
「たった一人の後輩の相手をするだけで、手一杯だよ」
「私だけなら、何とか相手ができるってことですか？」
「頭痛の種ぐらいかな」
「見くびられたものですね」
「おや、頭が痛くなってきた」
「気のせいだと思います」

チャイムが鳴って、先生が出ていく。
石井さんが、振り向いた。
「けーちゃん」
「何？」
「名前を呼んだだけ」
石井さんは、笑った。
「石井さん」
「うん？」
「名前を呼んでみただけ」
「大宮の逆襲だ」
石井さんは、また笑う。
「そういえば、陸上部に途中で入部した人、剣道部だったよね？」
「そうだよ」
「その人は、どんな様子？」
「すぐに、みんなと仲良くなったよ」
「へえ」
「タイムもいいから、期待されているって感じ」
「そうなんだ」
「読書部は？」
「え？」
「部員、増えないの？」
「そうだね」
「けーちゃんが、いるのに？」
「どういうこと？」
「こんなに美人の部員がいるのにね」
「石井さん」
「うん」
「ありがとう。私も、石井さんの笑顔、好きだよ」
「それなら、石井さんって呼び方、改めるべきだよね」
「石井さん」
「険しい道のりだ、こりゃ」
石井さんは笑って、敬礼した。

「コロンブスだよね」
顔を上げた。読んでいた本を、机に置く。
先輩は、部屋の隅を見ている。段ボール箱が四個、積まれている。
「何の話ですか？」
「人を集めるには、楽しいことをして、それを見てももらわないといけない」
「ですね」
「だけど、それを見てももらうためには、まず人が集まらないと、広まらない」
「この読書部の話ですか？」
「まあね」
「結局、まず何から始めればいいんですか？」
「卵かな」
「は？」

「それとも、鳥かな」
「先輩」
「やっぱり、コロンブスだよね」
「よくわかりませんが」
「そういうものだよ」
「もう、いいです」

「先輩に質問です」
先輩は、開いている窓を眺めていた。少し冷たい風が、部室に入ってくる。
「何かね、後輩」
先輩は腕を組んだ。
「結局、どうするんですか？」
「え？」
「部員を増やすために、です」
「ああ」
静かになった。
「先輩？」
「ん？」
「それで？」
「うん」
先輩が両手をあげる。
「結局、何もしないんですね」
「まあ」
「ここしばらく、話し合ったのに、ですか？」
「鍵は、かかかっていない」
「何の話ですか？」
「今は、それでいいよ」
「先輩」
「はい」
「最終回みたいですわね」
「何も始まっていないと思うよ」
「そうですか」
「まだ、何も」
その時、扉をノックする音が聞こえた。
「失礼します」
扉が開き、男子が一人、入ってくる。短髪で、背が高い。低い声だった。
「ここ、読書部、ですよ？」
先輩と顔を見合わせる。
「先輩」
「え、ああ」
先輩が椅子から立ち上がる。手を差し出しながら、言った。
「ようこそ、読書部へ」